

令和4年度上大久保中学校だより

上中だより

第8号

令和4年12月1日(木)発行

学校教育目標

「温かい学校 感動あふれる学校」

さいたま市立上大久保中学校

〒338-0824 さいたま市桜区上大久保861-1 TEL855-3901

<http://kamiokubo-j@saitama-city.ed.jp>

いそがしく時計の動く師走かな

けんもつ ゆきひこ
校長 監物 幸彦

朝夕めっきり冷え込む日が多くなりました。早いもので、今年も残すところあと1か月です。表題は、正岡子規の俳句ですが、俳句といえば「プレバト」というテレビ番組が好きで、よく見えています。俳人の夏井いつきさんが、お笑い芸人やタレントらの俳句を赤ペンでバツサリと添削していく。「視線の誘導が見事」と若手をほめたかと思えば、「俳句をなめてもらっては困る」と大御所に苦言を呈する。その小気味のよい解説に、魅力とずば抜けた才能を感じます。その印象のとおり、夏井さんは正岡子規と同じ愛媛県出身で、中学校で国語科教師をしていました。同じ教材でもクラスごとに対応できるように指導案を作り替えたり、不登校の生徒には家庭訪問を繰り返したりと毎日夜遅くまで働いていました。ある日、保育園に預けた娘が、母親の似顔絵を描く際、「あまり見ていないから忘れた」と言った言葉に激しく動揺し、教員を辞める決意をしたそうです。その後は、持ち前のバイタリティで「俳句甲子園」などの俳句の種まき運動を仕掛け、現在の俳句ブームの火付け役となっています。

さて、子どもの読書離れが叫ばれるようになって久しいですが、そのことと、国際学習到達度調査(PISA)での、読解力の国際順位が8位から15位へと、大きく順位を落としたことが重なり、読書や読解力向上の必要性がより一層クローズアップされました。本校では、令和2・3・4年度さいたま市教育委員会から「読解力向上等」の研究指定を受け、研究主題を「読解力向上を目標とした教育活動の工夫・改善」として全教科で研究に取り組み、11月29日に研究発表会を行いました。一般的に「読解力」といえば、「文章を読んでその内容を理解すること」だと思いますが、学校現場では「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」というPISA型読解力のことを指します。研究の詳細はホームページ上に掲載いたしますが、平成31年度の結果と比較して、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の値を大きく向上させることができました。

一方、図書委員会では年度当初より「目指せ1万冊」「Let's Go 1万冊」をスローガンに、年間貸出冊数の増加に向けて、取り組んでくれています。また、給食のメニューでは、全国読書週間にちなんで『本の中の料理』を採り入れ、11月7日は「はらぺこあおむし」に出てくる「カップケーキ」、11月9日は「わたしの幸せな結婚」に出てくる「きのこのポタージュ」を食べ、本の世界を味わいました。

ところで、読書の意義については、「読書は知識を蓄え、感覚を磨き、考える力を養うだけでなく、視野を広げ、想像力を鍛える」などと言われますが、落語家の林家たい平さんの著書「林家たい平の落語のじかん」の中に、想像力の大切さを語る以下のようなくだりがあります。(たい平さんは埼玉県秩父市出身でテレビ番組「笑点」に出演されています。)

「落語は想像力の世界です。想像力があれば、いま世界で起きているテロや戦争がなくなるかもしれません。戦争に巻き込まれた人たちが悲しい思いをする。いじめも想像力があれば、なくなるかもしれません。いじめられている子はどう思っているかな。いじめていることを知ったら、お父さんやお母さんはどう思うかな。環境問題もそうです。川や海が汚れることを想像して、ごみを少なくする。昔は想像力を使わないと、生活できませんでした。今は便利になって、何でも映像が押し寄せてきます。考えなくても、何か考えているような気になります。想像力のエンジンを回すためには、いろいろな体験をすることです」。

子どもたちの想像力を働かせるために、たい平さんは手ぬぐいを丸めて焼き芋に見立て、それを食べている姿を演じました。「落語家は扇子と手ぬぐいでいろんなことをしますが、想像力がないと何をしているのか分かりません。ある小学校で焼き芋を食べる姿をして、何をしているのか尋ねたら、『手ぬぐいを食べているところ』と(笑い)。続いて、麺をすすって食べる様子をしました。「何を食べているのでしょうか。当てたら、毎日新聞社からダイヤモンドがプレゼントされます」。ラーメン、うどん、そば。子どもたちから声が出ます。たい平さんは「きしめんが正解でした。毎日新聞社にダイヤモンドをプレゼントしてもらうわけにはいきませんから。ある学校で賢い子がいて、『麺類』と答えました。その時は、『温かいもずく』です」(笑い)

今の子どもたちは、テレビ・3Dゲーム・スマホ・YouTubeなど映像や動画中心の文化の中で生きています。それらに慣れ親しんでいる子どもたちは、実際に目で見ないと理解できない部分があるのかも知れません。だからこそ、今、想像力を育むことができる読書が必要だと考えています。我々教員は、生徒同士のトラブルがあった時に、「相手のことを思いやって想像力を働かせれば、トラブルをさけることはできたはず。」と指導することがあります。たい平さんが言う通り、想像力は、いじめや戦争をも防ぐ力となり得ると考えます。

本校での読書週間は1月に予定しています。読解力向上の研究が下地となり、冬休みや読書週間を通じて生徒一人ひとりに読書のすばらしさや豊かな想像力を育むきっかけとなることを願っています。